編者のことば

発端：昭和初期以前に中国語を学んだ人にとって最大の悩みは教科書・参考書・辞書がすこぶる不備だったことである。中国にりっぱな辞典“辞源”“辞海”のあらわれたのはそれぞれ 1915 年・1937 年であった。それとても両者とも文語を対象としたものであって、中国語辞典としてはおそらく最初のものであった周銘三編“国語辞典”（総ページ 281 の小型のもの）は 1922 年、“王雲五大辞典”は 1930 年、“標準語大辞典”は 1935 年であり、本格的な中国語辞典“国語辞典”の出現は 1936 年であった。

中国語辞典が出版されたのは、むしろ日本の方がはやく、大正のはじめごろすでに石山福治氏の中国語辞典があった。しかし、それは学生のわたくしが使ってもはなはだ不満を覚えたものであった。(1935 年同氏は本文 1750 頁におよぶものを出版された)。その後、昭和年代になってからは、1928 年に“井上支那語辞典”、1945 年に宮島・矢野氏“ポケット中国語辞典”、1941 年に竹田復氏“支那語辞典”など近代的な中国語辞典があらわれて、一応需要にこたえてくれたのであったが、それとても時勢の推移と要求の増大高度化に応じ難くなっていた。

外国語の辞書をつくることは、もとより容易なことではない。明治中葉以来、すでにわが国における西洋諸国語、特に英・独・仏語の辞典がほぼ完備していたのは、わが国におけるそれらの外国語の研究が進んでいたからであるが、実はそれらの諸国ではそれぞれの国語の研究が進んでおり、りっぱな辞典ができていたからだともいいうる。

しかし、中国においては従来学者は古文を重んじ、口語を軽んずる風があったので、中国語に対する中国の学者の研究はじゅうぶんではなかった。このような状況の下で石山氏や宮島氏・井上翠氏・竹田復氏らの辞典がよし多くの不備の点があったにせよ、中国語の辞典を編んだということは容易ではなかったことと思う。さはいえ、このような不備不完全な状態は克服されねばならないことを痛感したのであった。

従来、東亜同文書院は常時十数名の日中両国人の中国語教師を擁していたので、中国語辞典をわれわれの手で編むことは可能であり、またその責任もあると感じていた。そこでわたくしはわれわれの手で中国語辞典を編纂することを発起し推進した。編纂方針は井上辞典を出発点とし、これに必要な語彙を補充して現実の要請に応じ得る中国語辞典を作ろうというのであった。編纂業務は教学の余暇全員によって進められた。後に中日事変・太平洋戦争のために業務は停頓したが、敗戦後、敵産として中華民国へ接収されたときは、粗資料カード約 14 万枚あり、語数としては 7〜8 万語であったろうか。当時の語彙蒐集は次の諸氏によって進められていた。次に記してその労を謝する。

鈴木択郎　熊野正平　野崎駿平　坂本一郎　影山巍　岩尾正利　内山雅夫　山口左熊
木田弥三旺　金丸一夫　尾坂徳司　外に中国人講師八名（特に姓名を略す）

原稿カードの返還：戦後ややおちついた 1953 年 7 月愛知大学長（元東亜同文書院大学長）本間喜一氏から、辞典原稿をかえしてもらうよう願出ようと熱心に説かれた。わたしは原稿カード引渡しの際、接収委員鄭振鐸氏に対し「もし事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させてもらいたい」と口頭ながら申し入れてあったことを思い出し、願出て見ることにした。願書は日本中国友好協会理事長内山完造氏に依頼し中国科学院長郭沫若氏に送られた。同氏の斡旋により原稿カードは中国人民保衛世界和平委員会劉貫一氏から「日中文化交流のため改めて日本人民に贈る」という主旨で、1954 年 9 月引揚船興安丸に託して送りとどけられた。受入れの窓口であった日本中国友好協会は、この事業のもとの関係者を招致して協議した結果、もとの関係者が多く、かつ完成に熱意をもつ愛知大学にこれを委ねることになった。愛知大学では、この意義ある歴史的な事業を完成するため、その任にあたることを決意し、付託にこたえることとなった。

編纂業務の再開：本格的に中日辞典編纂業務が再開されたのは 1955 年 4 月であった。再開に当っては編纂委員会が組織され、わたくしが 1933 年以来この事業を発起し推進にあたって来た一人であったので編纂委員長を命ぜられ、専任者として元東亜同文書院大学予科教授内山雅夫氏、北京中国大学卒業張禄沢女史、愛知大学中国文学科卒業今泉潤太郎氏らを聘し、兼務専門委員として愛知大学教授桑島信一氏およびわたくしを加え、さらに学内外に協力委員数氏を委嘱し、一応の陣容をととのえた。1957 年にはさらに専任者として元外務省通訳官遠藤秀造氏、元 NHK 海外局宗内鴻氏、東北大学中国文学科特別研究生終了の志村良治氏、愛知大学経済学士杉本晃氏らを加え、その後さらに欧陽可亮氏も短期間であったがこれに加わり、編集陣容は充実された。この事業の完成はすべて上述の人人の御尽力によるもので深くその労を謝する次第である。特に内山雅夫氏のこの業務全般にわたっての綿密な企画運営と 13 年間 1 日の如きたゆまぬ精進、張禄沢女史、欧陽可亮氏によって多くの疑問が解決され語彙の採否が決定されたこと、今泉氏は途中 2 年間研究のためこの業務から離れたが、その後の長年月にわたり自発的に協力され、原稿カードおよびゲラの整理・漢字索引の研究作成や印刷全般にわたっての注意深い処理などに対して重ねて謝意を表したい。

なお、本学内外の下記諸氏から語彙蒐集の援助を受けたことを記して謝意を表する。

前神戸外国語大学教授（現関西大学教授）坂本一郎氏・前一橋大学教授熊野正平氏・前東北大学教授故野崎駿平氏・松山市西石井渡辺美登里氏・NHK 国際局佐藤堅一氏・中国研究所米沢秀夫氏・欧陽可亮氏

以上のうち坂本氏・佐藤氏は数年にわたり多数の新語を寄せられ、渡辺夫人はこの事業を新聞で知られ、年来中国において収録された中国料理に関する語彙多数を送って下さった。中国研究所からは御好意により資料カードを拝借することができた。本学内においては浅井敦・杉本出雲・向山寛夫（現国学院大教授）諸氏から援助を受けたことに対し謝意を表する。

本学学生諸君からも多大の援助を受けた。その人数も多数にのぼるので、一一姓名を記

さず、一括してここに謝意を表する。なお、伊藤克子氏には本辞典印刷段階の 1966・67 年の間根気のいるゲラの整理などを極めて正確に処理していただいたことを記して謝意を表する。

このようにして編集は順調にすすめられたものの、事業の大きさに比し編集陣容ははなはだ貧弱といわざるを得なかった。従って語彙の蒐集・選択においても所期の目標に達し得なかったことは残念に思っている。

一方においては幸なことには、五四運動以後大いに進んだ中国における中国語研究は、中華人民共和国成立後は、文字改革の気運が高まり、中国語の研究が急速に発展し、多くの出版物もあらわれ、辞典は“学文化字典”“同音字典”“新華字典”など小字典ながらすぐれたものがあらわれた。この外“機工辞典”その他の多数の専門辞書もあらわれて、豊富な資料が自由に入手することができた。わが国においても香坂・太田氏の“現代中日辞典”・鐘ヶ江氏の“中国語辞典”・倉石氏の“岩波中国語辞典”などが相ついで出版された。われわれのこの“中日大辞典”も以上のものから多大の恩恵を受けたことを記して日中両国の多くの学者諸氏に感謝の意を表する。

上述の如く、内外の事情はこの事業に有利に推移したようであるが、その反対に完成期をさきへ押しやるような事情も少なくはなかった。それは先ず完成期を 1961 年とした最初の見とおしが甘すぎたこと・中国における文字改革を全面的にとり入れたため多くの手なおし、書き改めを必要としたこと・3 千字以上の新旧活字を鋳造したこと・桑島氏が病気のため早い時期にこの陣容から離脱したこと・1963 年後半からは経費節約のため編さん陣容を縮小して別途人件費を必要としない鈴木・内山・張・今泉の 4 名としたことなどで当初予定の二倍以上、すなわち 13 年を経た今日ようやく完成を見るに至った。

中国からの援助：中国方面からは、1956 年 2 月北京の中国人民対外文化協会より同音字典・簡明字典・中国語文その他の資料の寄贈を受けた。1955 年 12 月中国学術視察団副団長馮乃超氏が愛知大学を訪問され、「為中日両国文化交流打好堅実的基礎」という題字を下さった。1958 年 4 月には中国法律家代表団、1964 年 6 月には中国経済友好訪日代表団、同 12 月には中国法律家代表団韓幽桐氏らがいずれも中日大辞典編纂室を訪れて激励して下さった。また 1966 年豊橋市長河合陸郎氏の訪中にあたっては、郭沫若氏は同氏に託して雄渾な墨跡「激濁揚清」を下さって激励して下さった。またわたくしが 1958 年に訪中した時には呂叔湘教授・文字改革委員会荘棟氏らから文字改革に関し多くの御教示をいただいた。何れも感激に堪えない。

編纂印刷資金に対する本学内外の援助：商業的採算に乗りにくいこの事業は、財政上の困難は免れ得なかった。幸にしてこの間 1956 年 7 月には文部省科学助成金機関研究費が交付され、1957 年には朝日新聞社・中日新聞社および某氏（本人の希望により特に名を秘す）から多額の助成金が交付され、他にある二名の方から貧者の一灯なりと称して小額ながら交付されて編集を援助して下さった。この日中文化交流に理解ある御好意はまことに有難いことであった。

編纂は以上の如くして 1966 年 4 月には一応完了したのであるが、出版は資金の関係で目途が立たなかったが、本間名誉学長の数年にわたる奔走は稔り、4 月に日本通運社長福島敏行氏の御好意により多数の予約をいただき、また時あたかも愛知大学創立二十周年に当るので記念事業の一環としてこの辞典出版を採用することになり、評議会の決議により出版費の大半が保障されたので印刷出版に踏み切った。その後、朝日新聞社・毎日新聞社からもそれぞれ多数の予約をいただいた。この両新聞社の予約はそれぞれ予約者の名義で中国へ寄贈して中国の好意を謝する予定である。

印刷出版：出版計画はすべて株式会社大安に委託し、印刷は図書印刷株式会社に依頼した。両者ともこの事業の日中文化交流・日中友好的性格に賛同し誠心誠意この辞典の完成に尽力された。株式会社大安は印刷所との交渉・印刷進行に関する計画・校正・予約・販売に関する計画・実施など一切をひき受け、図書印刷株式会社では中国の簡化漢字およびわが国では常用しない旧漢字など 3 千字以上の活字を新鋳するなど多大の犠牲を惜しまれず、大安・図書印刷・編纂者は常に緊密な連絡をとって円滑な進行をはかった。

校正は二三校を志村良治・荘司格一・長谷川良一・立間祥介・平田敏子・西山敏雄・井沢忠夫氏らのご協力を願った。

本間喜一氏は原稿カードを贈って下さった中国に対して、東亜同文書院大学の最後の学長として、また愛知大学の事業としての出版に対する責任を感ぜられてもろもろ配慮され、ついにこの事業を完成され、その責任を全うされた。すなわちこの事業は全く本間先生の熱意によってはじまり、御配慮によって完成したものであることを痛感し、茲にあらためて敬意と謝意とを表するものである。

なお、その間 1955 年 11 月に学長に就任し、1959 年 2 月物故された小岩井浄氏も愛知大学の窮屈な財政の中から編纂費を支出するため配慮され、また終始われわれ編纂員を激励し、その完成を期待して種々御尽力下さった。茲に謹んで感謝の意を表し、御冥福を祈る。

1967 年 11 月

愛知大学中日大辞典編纂処
編纂委員長　鈴　木　択　郎

〔注〕初版の序。